

今年取材テーマは「国防と防災」に決めた。もちろん、防災はともかく、国防はどこまで取材ができるか分からないが、チャレンジはしてみようかと思っている。

というのも、中国による台湾侵攻の可能性が高まる今後数十年間は、南海トラフ地震や首都直下地震の可能性もどんどん高まっていく時期だからだ。

実際、南海トラフ地震の発生確率は、80パーセントに引き上げられたばかりだ。

台湾有事が勃発すると、便乗して朝鮮半島の動乱も起こることは容易に想像できる。

となると最悪のシナリオは、南海トラフ地震、首都直下地震が続けておきたのちに、台湾有事、朝鮮半島動乱が起きることだ。

2030年の戦争

小泉 悠 山口 亮



2030年に向けて日本人が向き合うべき戦争の現実を分かりやすく解説している

実際、江戸時代の安政年間に、南海トラフ地震に続き、首都直下地震がおきたあと、政情不安がおさまらないなか、黒船騒ぎ、そして明治維新になだれ込んだ。

自衛隊は、南海トラフ地震が起きたら、それに乗じて中国は台湾侵攻するとにらんでおり、九州方面隊は救援に向かわず、対中国戦に備えるという。

日本で大地震が起きると、日本に駐留する米軍基地、各地の自衛隊基地が大きな被害を受ける。素人が考えても、台湾有事を誘発する原因となるだろう。

先日手に取った「2030年の戦争」（日経プレミアシリーズ）では、中国と北朝鮮が戦争に向けて着々と手を打っていることが分かりやすく解説されている。

それで、どう対応したらよいのか。本書では、「即応力」を発揮するためには事前にどのような臨戦環境を整えるかに尽きる、と説く。

即応力には「構造即応力」と「運用即応力」があるという。構造とはハードのことであり、運用とはソフト、すなわち機動力のことを指す。カギは、運用をどうか効果的に展開するかだという。

「勝負を決するのは即応力」、「運用がカギ」、「運用の効果的展開には事前の教育・訓練が不可欠」となると、これはまさに、防災における「避難対策」とまったく重なる。そして、開戦後は「予備力（人材、軍備ストック、兵站）」がものをいうという。これは防災においては、「関連死を防止する」ための「避難場所整備」、「備蓄力」と同じだ。

今後、数十年間は、あらゆる危機が重複する「危機、存亡の時代」となるが、どのみち、災害、戦争に備えねばならないのなら、「防災」も「防衛」にも対応できる人材の育成に取り組まざるを得ないわけで、そのような自律的で危機意識が高い人材を産み出せれば、ひいては少子高齢化を乗り切ることにもつながるのではないかと考えている。

（令和7年2月）